

市民社会をもたらす公共圏と
社会的世界としての公共圏

—— 社会学研究の礎石としてのハバーマスと
シンボリック・インターラクショニズムの融合 ——

鎌 田 大 資

市民社会をもたらす公共圏と 社会的世界としての公共圏

—— 社会学研究の礎石としてのハバーマスと
シンボリック・インタラクショニズムの融合 ——

鎌 田 大 資

ユルゲン・ハバーマスの公共圏 (Öffentlichkeit) 概念¹が、『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990=[1973] 1994) で導入され、社会学の共有財産となってからおよそ半世紀ものときが過ぎた。本論は、この概念を社会学における歴史分析に使用するための再確認作業である。近年、本概念は多方面で活用され、公共社会学の基礎概念としても位置づけられている。しかし本概念はハバーマスの創案によるものというよりも、ギリシャ、ローマ時代の古代人の政治生活を念頭にハンナ・アレントが使用した概念を、ハバーマスが独自の意味づけを施しつつ取り入れたものである。しかもはっきりした定義がなく、ハバーマスの用語法においても『公共性の構造転換』以後、独特なひねりをとれないつつ転用されてきた(花田 1996, 1999; 吉田 2000)。こうした状況を踏まえて、公共圏概念を使用しようとする研究者は、特にハバーマスに言及することなく、彼の用例を微妙に言外に響かせる程度の意図をこめ、一般的な語彙としてこの言葉を自由に使いこなしている²。

そのように、元来、はなはだあいまいな形で用いられてきた本用語に、あえて語義上の検討を加えようとする行為は無粋なものかもしれない。し

かし本論には、ハバーマスが『コミュニケーション³的行為の構造』(Habermas 1981=1985-87)で活用したシンボリック・インタラクショニズム (symbolic interactionism, 以下、SIと略記)の文脈に、ハバーマスの議論を再び取りこみ直すという目的がある。すなわち、日常生活の観察から導かれるミクロな社会的世界に関する理論化のツールと見なされがちなSIの理論的伝統に、マクロな歴史分析の側面を取りもどすために、本論ではあえて公共圏概念の発生と展開をたどったあとで、SIの実証研究の枠組として活用されてきた社会的世界論やグラウンデッド理論の展開に、公共圏概念の含意を再導入することを試みる。そうして接合された公共圏概念と社会的世界論の枠組を具体的に適用する領域として、論者は自身の従来の研究領域を補完、拡充する二方面を想定している。すなわち、日本で17世紀以降に印刷物によって流通した漫画(マンガ)を中心としたビジュアル公共圏の通史、および19世紀に社会学という用語が使用されはじめて以来の多様な理論、学説、社会における実践を、アーネスト・バージェスを中心とする初期シカゴ学派の社会学者たちが総合して、現状の社会調査を形づくり発展させた学説史の把握である⁴。

1、公共社会学、公共圏、市民社会論

まず本論の大前提として、19世紀に発祥し20世紀に大きな発展を遂げた学問である社会学のルーツを確認する。社会学の命名、発祥は、ハバーマスが論じるイギリスでの議会制の発達、アメリカ独立戦争、フランス革命における公共圏の発現の直後につづくものである。

社会学は公共圏や市民社会の学であり、その主要な道具立ての一つは社会調査である。この点を過去にさかのぼって検討する際に役にたつ一節が、マイケル・ブラヴォイの、アメリカ社会学会会長講演における公共社会学の提唱に含まれている (Burawoy 2005)。

ブラヴォイは社会学を専門、政策、批判、公共社会学の四部門に分け、

今日、一般公衆に向けて社会学からの情報発信をめざす公共社会学が、改めて重要になってきているのではないかと主張する。ブラヴォイによる社会学的労働の分化の表を掲げておく。この表によると、公共社会学は学界外の聴衆に向けられ、自らをふり返る⁵知識にかかわる社会学の一分野ということになる。

表、社会学的労働の分化 (Burawoy 2005:11)

	学界内の聴衆	学界外の聴衆
道具的知識	専門	政策
自らをふり返る知識	批判	公共

その講演中、命題十一「党派人としての社会学者 (Sociologist as Partisan)」には、「経済学の持ち場が市場とその拡大なら、政治学の持ち場は国家と政治的安定の保証であり、社会学の持ち場は市民社会と社会的なもの (the social) の擁護である。市場の暴虐と国家の圧制の時代には、社会学は、なかでもその政治的な一面において、人類の利害を擁護する」(Burawoy 2005:24) として、十八世紀に発祥した市民社会論と社会学を結びつけている⁶。ブラヴォイは市民社会を国家およびグローバル化した多国籍企業の外側に設定している。なぜかといえば、経済領域を中心に考えられてきた従来の市民社会の範囲から経済学の扱う領域を取りのぞき、彼が社会学研究の対象と考える「社会的なもの」という研究領域を、抽出しようとする意図があるからだろう。歴史的にも「市民社会論」と「社会学」は、同じ時代の流れを背景として生みだされた親縁性のある概念である。

ブラヴォイは公共社会学で追及される公共性について、アレントやハバーマスの公共性概念を引用しつつ、議論を進めている (Burawoy 2005:8)。ブラヴォイによる理論的伝統の把握にしたがい、次節では今日の社会学や政治学において多用されるハバーマスの公共圏概念を中心に考察する。

2、ハバーマス公共圏論の原像

ドイツ語での公共圏という言葉は日常会話でも多用され、むしろ英訳の public sphere という語が政治学、歴史学、社会学などで活用されることにより、新たに独特な意味が与えられた。そして、ハバーマス自身もこの動向に追随するかのようには語の用法を修正してきた。現在の「公共圏」は、公共善や社会的公正についての議論が戦わされる場という程度の意味である（吉田 2000；花田 1996, 1999；Calhoun 1992=1999）。

日常語であるがゆえに、ハバーマスは「公共圏」について、はっきりした定義はどこにも与えていない。むしろ以下のような語源の解説に集中する。すなわち、古い公的 (öffentlich) という形容詞をもとに、18 世紀のフランス語 *publicité*、英語 *publicity* などを模して作られた名詞であり、ギリシャに起源を持つ公的生活 (*bios politikos*) という概念がローマ法に取りこまれて、公的なものと私的なものを区分し、公事 (*res publica*) の領域を定める定義づけとなって継承されてきたとしている (Habermas [1962] 1990:14-17=1994:13-15)。ここでハバーマスはこうした概念整理の出典としてアレントの『人間の条件』(Arendt [1958] 1998=[1973] 1994) を挙げている。

アレントは、ギリシャのポリスにおける政治生活で見られる公的領域 (public realm) と、私的領域 (private realm) の区別を論じている。古代ギリシャの公的領域では、責任ある諸個人がポリスの政治生活への平等な参加者として、堂々と自己の政治的意見を述べて対等に論じあう直接参加の政治的議論をなし得たものとアレントは考え、そうした領域を改めて構築することを提唱した。彼女は実生活においてもナチズムによるユダヤ人迫害の経験者として、一方的に迫害されるだけの被害者としてのユダヤ人像という社会的通念に拘束されず、ユダヤ人の犯した悪を認めさせまいとする政治的圧力にも惑わされず、ナチスに協力したユダヤ指導者の実像を、自己の目に映じる限りでの歴史状況として描き、信念を表明する倫理

的態度を貫いた (Arendt [1963] 2006= [1969] 1994)。しかし興味深いことに、イギリスにおける議会制の発達以降、産業革命を経て現代に至る豊かな物質的生活が享受されるようになる過程で、公的領域と私的領域の区分を攪乱するような、社会的なもの (the social) という視点から人間が捉えられるようになったと、『人間の条件』(Arendt [1958] 1998=[1973] 1994) において彼女は考えた。経済政策や税の徴収といった政治実務のなかで、個々の人間やその意志、意見ではなく、合算、数量化された人口や財の動向が重要視されるようになり、個人の意志や意見を飲みこんだ集合的な意見としての世論が、政党の人気や勢力を左右するものとして語られるようになった。こうした傾向は、公的生活における諸個人の毅然とした意見表明を志すアレントにとっては墮落、疎外を意味する⁷。

実際に、歴史上、人間の集団を人口と捉え、その動向を調べるようになった時期はまさしく、イギリスにおいては、17世紀のオリバー・クロムウェルによる宗教的指導の結果としての王政の廃止の時期であり、隣国のフランスとの国力の比較を数量的におこなう政治算術 (Petty [1690] 2011=1955) として、大量の人数や富を扱う集計の技法が発展し、今日、統計と呼ばれる技術に変貌していく。したがって、ハバーマスが公共圏の確立について述べる英米仏のブルジョワ革命期は、アレントにとって、社会的なものの台頭と公的領域の墮落の時代となり、公共領域の構造転換は、ハバーマスの公共圏の発生の時点ですでに終了していた。

アレントを援用しつつ英米仏のブルジョワ革命期を公共圏の確立の時代として論じること自体に、上記のような歪みが孕まれている。そして、のちにハバーマスがイギリスに発祥する市民社会 (civil society. Ferguson [1767] 1980=1956) の捉え方を導入して、公共圏という語の用法を修正していくことの布石として、彼の議論にはこの歪みがはじめから内蔵されていたと考えてもよいだろう⁸。

ハバーマスが『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990=[1973] 1994) で論じようとしたのは、英米仏の市民革命において成立したと考え

られるブルジョワ公共圏 (bürgerliche Öffentlichkeit) である。定義づけとしては、たとえば、以下の部分が引用される。

ブルジョワ公共圏は、さしあたり私人たちが公衆として結集する領域として捉えてもよいかもしれない。当局により規制されてきた公共圏を、そうした私人たちはまもなく公権力そのものに対抗して自分のものとして主張することになる。それは、原則的には私有のものだが、公共的な重要性ももつようになった商品交換と社会的労働の圏内での、交渉の一般的規則について公権力との論争に携わるためであった。この政治的対決の媒体は特有で、歴史的に先例のないものである。それは人々が自分たちの理性を公共の場で使用するということ (公共の論議) であった。(Habermas [1962] 1990:86=[1973] 1994:46=1992:27)⁹

ハバーマスが公共圏を特に「私人たち」のネットワークとして定義している理由は、ブルジョワ革命の時点で「解放」されたのが、当時の絶対主義化した国家に抑圧された臣民だったからである。またドイツの社会状況として教養を身につけ一定程度の収入を得た「市民」には、国家に官僚として雇用された「公人」が多かったという点も関連していることだろう (野田 1997; 西村 1998)。要するに、現代の社会生活に適用する場合、国民生活にかかわる公共的な事柄について、「公権力との論争に立ち向かうための人々のネットワーク」といった点だけを、定義として汲みとればよいと思われる。

この概念は、あくまでも一回限りの現象として観察される歴史的データの説明にもちいられたものであり、多様な現象に当てはまるものとして一般化されるべきでもなかったはずである。それゆえ、この時点で定義がいまいだったとしても、その本来の意図は損なわれない。

ブルジョワ公共圏と呼ばれるこうした領域が成立する際に、イギリスで

は独裁者となったクロムウェルの神聖政治の時代に、チャールズ1世が処刑され、クロムウェルの死後、王政復古してチャールズ2世が即位し、立憲君主制の議会制がしかれるというマクロな制度変化が観察された。そしてアメリカでは本国に叛旗を翻し独立を宣言した植民地政府による戦争がおこなわれ、フランスでは蜂起した民衆の支持を得た革命政府が組織され、ルイ16世やその家族を処刑したのちに、革命指導者たち自身もお互いを糾弾しあって断頭台の露と消え、国民的人気を得た軍人ナポレオン1世が帝政をしいて即位するものの、短期間で失脚するといった歴史過程を論じるのが、通常政治史の教科書的な展開である。しかしハバーマスはそうした政治史のドラマに埋没するのではなく、民主主義のインフラストラクチャーとなった討議の場所、すなわちブルジョワ公共圏をめぐる社会史に集中する。その概要は以下の通りである。

18世紀には、絶対王政下で徐々に振興しつつあった産業、商業の発達の担い手として財を蓄えたブルジョワの家庭では、多くの使用人を従えて家事を取りしきる主婦が中心となり、育児や家事全般に精力を注ぐブルジョワ親密圏が成立する。小説、詩歌などの文芸作品を享受、鑑賞し、その感想を論じあうつどいが、家庭内にしつらえられた客間(サロン)で開催されはじめ、上流貴婦人が主宰する文芸的公共圏が成立する。また十字軍の遠征やアラブ人によるウィーン攻囲によってもたらされた薫り高い飲料、コーヒーを味わう喫茶の習慣が広まる。各種の雑誌、印刷物が閲覧でき、政治的討論の場としても活用されたコーヒーハウスがサロンと同様の役割を果たし、多様な階層の人々が政治的意見を戦わせる政治的公共圏が成立する。それは階層を超えて政治的議論をおこない、王政打倒の論説を流布させるコミュニケーションの場である。そこで指導者たちに扇動された民衆が蜂起して、ブルジョワ革命をもたらされたとはハバーマスは考える。

こうした捉え方はきわめて一面的かつ図式的であって、歴史資料の精査によって多方面から切り崩されてきている。

たとえばブルジョワ親密圏から文芸的公共圏が生じ、さらに政治的公共圏へと発展するという流れに関しては以下の事実が対置される。フランス革命後、為政者となった革命指導者たちは、早い時期にジャコバン・クラブなどの民衆の政治的議論の場の閉鎖を模索し、貴族による大規模な土地所有が廃止されることと同様に、特権の排除を目的として、職人たちの同業組合などの中間集団が禁止された。そしてフランスにおいては、王に仕える臣民から主権者としての国民になった個々人が、中央集権化した国家にじかに対峙する状況が生まれる。そこでは人々が国家に対抗して連合する中間集団の結成が阻害されたと考えられる¹⁰。すなわち革命期に民衆たちをも巻きこんだブルジョワ公共圏は、革命政権が短期間に自壊してナポレオンによる帝政がしかれる歴史的経緯のなかで、あっという間に収縮して有名無実のものとなった。

また絶対王政下で組織された科学アカデミーでは、表面的には王の統治に奉仕するような議論だけが認可され出版されたような体裁になっていた。しかし実態としては、王や側近が細かい科学的議論のすべてを追いきれるものではなく、アカデミーに組織された科学者たちが審査できる範囲で認定された科学的事実が、王の承認を得て出版されるという形を取っていた。すなわち、大規模化し中央集権化した国家運営の進展とともに、科学的手続きを踏んだ事実や法則の認定が導入されていく。現在の科学の自律的営みの萌芽がここに見られる。こうした指摘も絶対王政下で抑圧された民衆に関する通俗的理解を覆すものだろう。こうした科学アカデミーでの活動を土台にコンドルセのような数学者、科学者が革命期の指導的な理論家として頭角を現したのである（隠岐 2011）。こうした動きは王政の内部に根ざしており、文芸的公共圏や政治的公共圏などの概念を導入せずとも論じられる。

ハバーマスの見解では、英米仏のブルジョワ革命期に成立した公共圏は、19世紀以降、産業革命の進展とともに墮落する。すなわち、普通選挙、婦人参政権の達成に取り組む政党主体の政治へと制度が整除され、産

業化が進展していくにつれて、企業が売りだす消費財(商品)や文化的産物の広告と、政党による政治プロパガンダの機関としてのマスコミュニケーションが支配する場へと、それは構造変容した。公的な領域が社会的なものに侵食されていくとアレントが考えた墮落の時期を、ハバーマスはこうして2世紀ほど後世にずらして設定し、まさしくアレントが社会的なものの台頭の時期と考えた時期に、政治的公共圏が成立したと考えた。このような議論の方向性はハバーマスが属するフランクフルト学派の、大衆社会における道具的理性批判、文化産業批判などの文脈から要請される理論的帰結であっただろう(Horkheimer & Adorno [1947] 1981=2007)。しかしそのように歴史を捉えると、英米仏の市民革命期に成立した公共圏は、歴史的な一回性の現象として消滅してしまったことになり、構造変容を経た現在におけるその発動を語るができなくなる。

ところが public sphere という訳語の流通により、若干、ニュアンスが変わり、いつの時代、どこの地域にでも成立しうるものという含意をもって語られ始めた公共圏概念と、『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990= [1973] 1994)で語られたそれとの齟齬は、このあと50年以上つづくハバーマスの理論的営為において、新たな公共圏概念の位置づけとともに回収されていく。

3. 公共圏概念の変遷とミードからの示唆

やがて公共圏概念は、インターネット、地上波放送、ケーブルテレビ、衛星放送などによる放送事業などを論じる際に親和性のある概念として活用され、おおまかに、公共善や社会的公正についての議論が戦わされる場といった程度の意味で、平等性、自律性、公開性などの特徴をもつものとされるようになった(吉田2000; 花田1996, 1999; Calhoun 1992=1999)

ハバーマス自身も、『近代——未完のプロジェクト』の序文では、「現実はいかに違おうと、そこにおける立場を通じて態度の変化というものがも

たられるはずの公共の議論の場」「シビル・ソサエティに根をおいた公共の議論の場という散漫なネットワーク」(Habermas 2000: xiii, ix) などの表現で、社会的発言を志す知識人の活動の場として同時代における公共圏を語るようになる。

そこに至るまでの理論的経緯、すなわち『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990= [1973] 1994) から、『コミュニケーション的行為の構造』(Habermas 1981=1985-1987) を経て、『事実性と妥当性』(Habermas 1992a=2002-2003) へといたるまでに、ハバーマスの公共圏理解は、フランクフルト学派の道具的理性批判をふまえたマスコミへの否定的な評価から、ハンス・ヨアスによるミード読解 (Joas [1980] 1985) を援用したプラグマチズム的な希望の表明へと、変遷していく。

そうした変遷に関する概括的な考察はすでに存在する (花田 1996, 1999)。そこで本論では、ハバーマスのミードやプラグマチズム理解を通して垣間見える変化を特に検討する。

まず『コミュニケーション的行為の構造』(Habermas 1981=1985-87) では、デュルケーム、ミード、ウェーバーの検討を経て、マスコミを文化産業として否定的に捉える路線を基調としながらも、市民的な討議の媒体としての両義的な期待が表明される。

『公共性の構造転換』第二版の序文では、第一版の公共圏がブルジョワ革命で実現されたブルジョワ公共圏であったことを考慮し、アダム・ファーガソンの市民社会の考え方 (Ferguson [1767] 1980=1956) に言及しつつ、概念の拡充を図っている (Habermas [1990] 1992=1994)。

さらに、『近代の哲学的ディスクール』(Habermas 1985=1990)、『事実性と妥当性』(Habermas 1992a=2002-2003) では、共通善や社会的公正に関する議論の場としての期待が表明される。この時点での公共圏についての言葉の使い方はミード、プラグマチズム、SI における用法と親縁性のあるものになっている。

たとえば以下の、『近代の哲学的ディスクール』の一節に見られるミー

下的な議論の運びの踏襲を参照。「相互性にもとづく承認関係によって結びついた相互主観性のネットワーク」を論じたこの一節では、公共圏という言葉は登場しないが、自律した公共圏を可能にするコミュニケーションの合理性と、個人の社会化の仕組みを検討している。

意味の領域でいえば、仮に文化的再生産がもつばら批判を通じてしか行なえなくなっても、伝統の連続性が破壊されることにはならないだろう。[……社会的空間では]¹¹生活世界が構造的な分化をとげると、生活世界で確立された討議にもとづく意志形成の手続きが、個々人の利害をひとしく考慮しつつも、万人の万人に対する社会的結合を保証するように規定されるからだ。つまり、個々人が討議への参加者として、その取り換え不可能な「然り／否（イエス／ノー）」によって、完全に自立するようになるのは、彼が共同の真理探究を通じて、普遍的な共同体に結びついているという前提にもとづくときだけなのである。[……]生活世界が構造的な分化をとげると、〈社会化は同時に個人化として達成され、また逆に、諸個人はみずからを社会的に構成していく〉という原理が当初から有効な原理として承認されるからだ。社会化が行なわれる相互行為での了解志向的な言語使用¹²では、われ・汝・われわれという人称代名詞の体系によって、個人化への意図せざる強制が据えつけられるが、しかしそれと同時に、同じ言語メディアを通じて、社会を形成する相互主観性の力も活発になるのである。(Habermas 1985:401=1990:II, 598-599=1987:346-347)

ミード理論では個人が社会のなかで社会化し役割を取得、形成していくと同時に、個人の周辺環境である社会も次第に分化して、その個人を含む複雑な組織が形成されていく。こうした仕組みにハバーマス流の表現を与えたのが上記の一節であろう¹³。

『公共性の構造転換』の英訳 (Habermas [1962] 1990=1992) 出版後の

アメリカでのシンポジウムで、合理的なコミュニケーションの条件として、自らをふり返ること (reflexivity)¹⁴ について問いかけられたハバーマスの回答の一部は、はっきりとミードの社会的自己論、役割 (態度) 取得論に由来する表現を用いており、公共圏概念とミードの思想の接合が図られている。

実際のところ、道徳固有の問題ということになると (それは政治においても起こることですが)、自らをふり返ることは、われわれ自身の遺産からもう一歩あと戻りしなければならないということの意味していると思います。一歩あと戻りするだけで、さまざまなアイデンティティの違いに気づくことができるのです。ジョージ・ハーバート・ミードが理想的な役割遂行と名づけたもの、すなわち他人の靴を履いてみるということです。もちろん、これは日常生活において起きることですが、ヨーロッパのような多元的文化の社会ではましてそうです。そこでは、自分のところ以外のアイデンティティは、われわれにとってはあいかわらず不可解なものですが、ある程度は相互に承認されているのです。それが自らをふり返ることなのです。自らをふり返ることは、少なくともいわゆる前近代と近代とのあいだの閾 (threshold)を確認しようとする際の基準になります。(Calhoun 1992: 474=1999: 323)¹⁵

ミード自身の (またはミードの言葉として編集された)、『精神・自我・社会』(Mead 1934=1973) に有意味シンボルの共有による普遍性の達成について論じた以下のような部分がある。

人はコミュニケーションをおこなうまえに、コミュニケートすべき何かをもっていなければならない。一見、人は別の言語象徴をもっているように見えることがあるが、もし彼がその言語をつかって話をして

いる人々と共通の観念¹⁶（そして共通の観念は共通の反応を含んでいる）を、まったくもたないとすれば、彼はその人たちとコミュニケーションすることはできない。したがって、会話（discourse）の過程すらその背後に協同的活動がなければならない。コミュニケーションの過程は、普遍的宗教の過程あるいは普遍的経済の過程よりも普遍的なものであり、その点でコミュニケーションの過程は、宗教的過程や経済的過程の役にたつ（Mead 1934:259=1973:272-73）。

ミードは科学史を参照しながら議論を進めており、この一節のあと、科学的共同体の普遍性について、さらに科学者たちが議論を交わす話想宇宙（universe of discourse）¹⁷について論じている。科学的真理をめぐる議論のみならず、社会正義や公共善についての対話をおこなう話想宇宙も、これと同じ論法で成り立つことが想定できる。

また、有意味シンボルの共有により話想宇宙において達成される普遍性についての一節は、普遍的なものを取り入れた諸個人が社会化を果たして個性的な存在となったあとも、普遍的なものの存在は残るという先ほどのハバーマスの論じ方によく似ている。

個人が他人の態度を取りいれるかぎり、シンボルは普遍的だが、シンボルがそのような〔特定の反応に対応するという〕¹⁸ 限定を受けているばあい、そのシンボルはほんとうに普遍的だろうか。わたしたちはそのような限定を越えられるだろうか。論理学者のいう話想宇宙の考え方により普遍性の限度は明らかに示されている。昔、その普遍性は論理的な公理の組合せのなかにあらわされていると仮定されていたが、その仮定された公理は普遍的でないことがわかった。そこで、事実上、普遍的であるべき「普遍的」な語り（discourse）はたえず改訂されねばならなかった。普遍的な語りは、わたしたちが接触する合理的な存在を表象するだろうし、このような〔合理的な存在の〕世界

にあるという点で潜在的な普遍性がある。わたしは有意味シンボルの使用にかかわるものだけが普遍的なものだと考えている。このような意味で、普遍的な意味をもつ有意味シンボルの組合せをわたしたちが手にいれることができれば、このような言語で知的に語ることのできる人は誰でもここでいう普遍性を手にすることになる。(Mead 1934: 269=1973: 282)

ミードの普遍性概念は、行為者同士のやりとりのなかで常に修正を加えられる暫定的なものでありつつ、普遍的なものとしての機能を果たす。こうした柔軟かつ変幻自在で、時間の経過のなかで変形を遂げる不定形な概念、シンボル、普遍性という微妙な捉え方を、ハバーマスが引き継いでいるかどうか。それは確信をもっては語れない。しかし、そうした点はミードに返ってしっかりと再検討していく必要がある。

公共圏概念はこうした位置づけの変化を経て、明確な定義が存在しないまま、各種各様にもちいられつづけている (Calhoun 1992=1999)¹⁹。現代社会では公共善を謳う立法、司法、行政の三権が稼働して、選挙制度により民主主義的な正統性を付与される政府が現に存在している。そこで公共性のある事柄を論じあう社会的な場や、公共善の実現をめざして運動する社会組織やその活動の場が存在しうるとは、当然かつ自明なのかもしれない。本論ではミードの説を想起しながら、社会的な不公正、不正義の状況が集合的に認識されるごとに、特定の問題をめぐる話想宇宙が公共圏として立ちあがり、普遍性のレベルで捉えられがちなその問題に関する状況の定義も、時間の経過や相互作用のなかで揺れ動くというイメージで捉えておく (Mead 1934=1973)。

ハバーマスの現状における最後の大著と思われる『事実性と妥当性』(Habermas, 1992a=2002-2003)での公共圏の取りあつかい方は、さらに現代社会で観察される事例に合致するような形態に踏みこんでいる。ちょうどブラヴォイの公共社会学にも呼応する形で、通常のコミュニケーショ

ン過程を通じて公衆一般に働きかける社会運動の場として、ハバーマスは公共圏を捉えている。そこで重要になるのは、非専門家である素人にも理解できるように論点を伝達する能力である。

公共圏と呼ばれる領域には以下のような幅があるとハバーマスは指摘する。

[……]公共圏はコミュニケーションの密度、組織の複雑さ、影響範囲の点でいくつかのレベルに分化する——それは、居酒屋、コーヒークラス、路上でのごく一時的な公共圏²⁰ から、芝居の上演、PTA、ロックコンサート、政党の集会、教会の大会など、催事としての、すなわちアレンジされた公共圏を経て、大きな地理的領域、または地球全体にすら散在する読者、聴衆、観客からなり、マスメディアによってのみつくられる抽象的な公共圏にまでいたる。(Habermas 1992a:452=1996:374=2003:下105)

また18世紀末のブルジョワ革命の時期から重要な役割を果たしていた印刷物をはじめとするメディアの役割は、現代ではもっと大きくなっており、肥大化したマスメディアが国民と為政者の間に入って大きな影響力をもつようになる。社会問題が生活史に共鳴、反映するところで私的なものとして取りあつかわれる²¹ という点から、公共圏は一般公衆へのアピールを獲得する。こうした親密圏と公共圏の密接な結びつきは以下のようなことに特徴的にあらわれる。

[……]17、18世紀のヨーロッパ社会において近代的なブルジョワ公共圏が、「公衆として集約された私人の領域」として作りあげられたといことがある。歴史的に見ると、公共圏と私的領域の関連は、新聞、雑誌を通じて結晶化した読者公衆としての、ブルジョワである私人のクラブや組織の形態にその姿をはっきり示す。(Habermas 1992a:443)

=1996:366=2003:下96-97)²²

こうした用法の変遷を経て公共圏概念は、すでに見た『近代——未完のプロジェクト』の序文における、「そこにおける立場を通じて態度の変化というものがもたらされるはずの公共の議論の場」「シビル・ソサエティに根をおいた公共の議論の場という散漫なネットワーク」(Habermas 2000: xiii, ix) などの、現代社会に関する議論にも導入しやすい定義に到達する。

ここまでくると、福祉、医療、軍事、経済、教育など国民生活にかかわる公共的な事柄を論じあう社会運動の場を、すべて公共圏と捉えて分析することができるようになる。しかし法社会学を拠点とするハバーマスの議論は、現実社会の分析においては時評的な考察にとどまる傾向があり、腰を据えて特定の問題領域の実証研究に向かう際には、社会学の従来の分析枠組との接合を考えるべきであろう。この面に関し、SIの伝統では社会的世界論の枠組が提起されてきた。そしてこのタイプの分析では、医療や科学研究の領域での研究の蓄積がある。

4、社会的世界論

社会的世界概念は1920年代のシカゴ・モノグラフなどにおいては、特にはっきりした定義もなく、生活者が身を置く社会的環境とはほぼ同義のような形でもちいられていた。この概念はタモツ・シブタニの古典的な二本の論文 (Shibutani 1955, 1962) で、ロバート・マートンらが提示して注目を集めていた準拠集団論 (Merton 1968:279-334=1961:207-256) と結びつけられ、理論的な位置づけを与えられた。アンセルム・ストラウスは、SI研究学会の研究年報 *Studies in Symbolic Interaction* に発表した三つの論文 (Strauss 1978, 1982, 1984) で、社会的世界概念を実証研究に応用するための検討をおこない、芸術や趣味の世界についての研究動

向を中心に豊富な例示を与え、研究の発展を促した。この時点でストラウスが挙げた社会的世界の例は、オペラ、バレエ、野球、サーフィン、芸術、切手収集、登山、カントリー・ミュージック、同性愛、政治、医療、法、産業、数学、科学、カトリシズムなどであり、空間、対象、技術また技巧、イデオロギー、(他の社会的世界との)交錯、(メンバーの)リクルートなどを通じ、もとのものから分かれて下位世界に分化、ほかの社会的世界と合流し、新たな社会的世界として勢力を拡大する (Strauss 1978:121, 1982:172, 1984:124-125)。ストラウスの三つの論文自体は、当時、研究が進んでいた芸術世界論の研究 (Becker [1982] 2008) と連動して、芸術、芸能、趣味の世界の事例に関して紙数を費やして考察している。また1970、80年代に勢いがあった組織研究における資源動員論の動向を意識したものにもなっている。

ストラウスはバーニー・グレイザーとの合作で終末期医療の研究に取り組み、グラウンディド理論と呼ばれる質的研究の方法論を提唱している (Glazer & Strauss 1967=1996)。これは、既成の理論に反する反例を探して新たな理論的定式化を図るアプローチであり、カール・ポパーらの科学論における論理実証主義 (Popper 1959=1971) の枠組を、質的研究に導入したものと見なし得る。この方法論は看護、福祉分野の研究において広く活用されてきた。またストラウスたちの精神病院に関する共同研究で提示された「交渉された秩序」アプローチは、社会現象や社会的相互作用を過程のなかで現実的に捉えるため、交渉に参加する人々が準拠枠として参照する交渉文脈を、ケース・バイ・ケースで丁寧に分類整理することを提唱している (Strauss et al. [1964] 1981; Strauss 1978a)。

実証研究としての社会的世界論では生殖医療、癌研究などの医療、科学分野についてのものがあり、さらに新しい「状況分析 (Situational Analysis)」と呼ばれるアプローチにおいては、1990年代以降に出版が進んだミシェル・フーコーの講義録の視点を取り入れ、いわゆる生政治 (bio-politics) に関し、資料の美的、感性的な分析をおこないつつ歴史的

文脈を検討する研究法が提唱される (Fujimura 1996; Clark 1998, 2005; Foucault 2004=2008)。また生医療化 (biomedicalization) や、テクノサービス複合企業 (TechnoService Complex Inc.) と医療組織の癒合を取りあげ、先端医療が開く社会コントロールの領域の批判的研究も提唱されている (Clark et al. 2003)²³。

ここで注意すべき点は、まず英米仏のブルジョワ革命期に成立し、ヨーロッパ、また人類全体に影響を及ぼす大きな射程をもつものだったが、19世紀から20世紀にかけて構造変容したとハバーマスが『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990=[1973] 1994) で考えた公共圏と、次に20世紀から21世紀にかけて、公共の論点について一般公衆に向けた議論をおこない、政治的、社会的態度の変容を目指すべく立ちあげられる多数の小さな公共圏との区別である。便宜的にここでは前者を、憲法によって市民社会の実質を守ろうとする公共圏と考え、「市民社会をもたらす公共圏」と呼ぶ。そしてSIにおける社会的世界と同様に考えられる後者を、「社会的世界としての公共圏」と名づける。このように見ると、ハバーマスが1990年代に入って理論的に位置づけた社会的世界としての公共圏は、実は公共圏という面に特に注意をはらわない形で、従来のSIの医療、科学、犯罪、非行、福祉、社会問題研究などにおいて多様に考察されてきていることに気づく。

したがってSI理論において公共圏を論ずる利点は、むしろ、ヨーロッパの歴史において、18世紀後半に成立した「市民社会をもたらす公共圏」という大規模な社会現象を捉える概念を、導入することにある。そこで可能になる考察は、扱っている時代の特性から19世紀の生物学に影響を受けた社会進化論、20世紀社会学の近代化論などと似通ったものになると考えられるかもしれないが、SIの社会的世界論とハバーマスの市民社会をもたらす公共圏という発想を組みあわせることで、それにとどまらない清新な視角が与えられる。すなわち、17世紀頃からの印刷メディアの発展と市民社会の到来を関連づけ、20世紀に入ってから社会調査の成立

に向かう社会学の変容を論じる際などに、時代のなかで重要な影響を与えあつたはずの行為者の思想や行動の意義を、彼らの手になる諸作品を手がかりに、歴史的、実証的に論じる文脈が与えられる。ただし『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990=[1973] 1994)で、50年以上前に提示されたハバーマスの意図を継承するためには、個々の研究者の視点から、その後の歴史、社会学の進展を受けとめて世界史、近世史、近代史を再構成するよう改めて努力する必要がある。ただし本稿では、ハバーマスの概念をSIの理論的蓄積に取りこむうえでの諸注意を示すことにとどめ、「市民社会をもたらす公共圏」の構成の具体的な叙述は稿を改めて提示することとする。

まとめ

ヨーロッパ社会を席卷し、地上の他地域、他国家へも順に影響を広げた市民社会をもたらす公共圏は、ハバーマスが『公共性の構造転換』(Habermas [1962] 1990= [1973] 1994)で述べるように、政党の成立、選挙制度の拡充、一国を超えた国際的企業体の発達などの流れのなかで墮落し、政治的プロパガンダと商品に関する広告を産業として伝えるマスメディアにより方向を歪められたまま、現在に至った。しかし帝国主義的植民地経営、多国籍企業の支配が横行するグローバリズムの世の中にあっても、個別の医療、福祉、保健、犯罪、非行、教育などの社会問題について、時宜に応じた促しにより、社会的公正、正義が損なわれているという状況が集合的に認識されるごとに、特定の問題をめぐる社会的世界としての公共圏が立ちあがる。

社会問題の実証的研究における社会的世界論の有効性は変わらず、公共性の高い社会問題を捉える認識枠組もそこに組みこまれているので、それを公共圏論としてリニューアルする研究上の利得はそれほどない。逆に、公共圏について経験的に観察、考察する場合には、ネットワーク自体の存

在を指摘するだけでなく、それが公共善や社会的公正についての議論の場になっていることを述べ、その議論自体の経緯も記述、分析すべきである。

上記の社会的世界としての公共圏とは区別して、ブルジョワ革命期に生じ、一回限りの歴史的現象として語られる市民社会をもたらす公共圏の考え方は、18世紀にはじまる歴史の巨視的な動きを、清新な社会学的視野において捉えかえすうえで有効である。

注

- 1 著書名として定着した『公共性の構造転換』のタイトル表記以外の *Öffentlichkeit* の訳語は、引用文、本文ともにすべて公共圏とした。
- 2 ハーバース自身の概念使用の検討をおこないつつ公共圏の分析を試みた最近の文献として、飯島 (2012)、宮本 (2012) を参照。
- 3 コミュニケーションの表記は、ハーバースの訳書の表題のみは現行表記を活かし、引用文などでは本論でベースとしている英米系の翻訳表記にしたがい「コミュニケーション」と直す。同様に本論中に引用された訳文の表記は、他の点でも本文に合わせて細部を手直ししている。
- 4 パージェスを中心とする社会調査史については、鎌田・中野 (2003-05) ; 鎌田 (2008, 2010, 2011) など、漫画 (マンガ) 史については鎌田 (2011a) などを参照。また本論は、多岐にわたるハーバースの業績のうち、こうした目的に関連する側面に的を絞って論じたものであることを付言しておく。
- 5 「自らをふり返る」という言葉は *reflexive* の訳語としてもちいる。
- 6 ブラヴォイの叙述は以下の通り。ただし本論では、[……]は引用者 (鎌田) による省略を意味する。

[……]社会学は、社会的なものの拡大という利害関心を持ちつつ市民社会に依拠する。／ [改行] だが市民社会とは何か。[……]それは19世紀西欧資本主義の産物と定義できる。19世紀の資本主義のために諸団体、運動、公衆などが作り出された。それらは国家と経済の外側にあり、政党、職能組合、学校教育、信仰集団、印刷メディア、多様な任意団体などである。このような団体生活の集積が社会学独自の持ち場であり、スターリンのソ連、ヒットラーのドイツ、ピノチェットのチリなどでのように、団体での活動が消滅すると社会学も消える。ペレストロイカのロシアやアパルトヘイト末期の南アフリカなどでのように、市民社会が栄え

ると社会学も栄える。／[改行]社会学は社会にへその緒でつながれているが、もちろん社会学だけが市民社会を研究するわけではない。とんでもないことだ。だが、社会学は「市民社会という持ち場」から国家や経済を研究する。(Burawoy 2005:24)

- 7 いうまでもないことだが、社会的なものに関するアレントの否定的な捉え方は独自のものである。たとえば、先のプラヴォイが、社会的なものを国家や国際資本に抗して人々が連帯する協同の次元とした肯定的な捉え方とは、明らかに異なる。
- 8 18世紀以降の歴史を考えるうえでのファーガソンの市民社会論の重要性に関しては、稿を改めて詳述する。本論では訳語においても、ブルジョワ社会(bürgerliche Gesellschaft)と市民社会とは分けている。
- 9 引用箇所を選定に関しては岸川(2011:117)を参照。以下、ハバースムの訳文では英訳も参照している。
- 10 こうした経緯を考察するためには、富永(2005)を参照。
- 11 []は引用者(鎌田)による省略と補足を表す。
- 12 了解志向的な言語使用という言葉は、『コミュニケーション的行為の構造』(Habermas 1981=1985-87)においてミードを吟味した際に採用された。
- 13 こうした公共圏概念の変容は、ウェーバーからルーマンにいたるシステム理論の展開への批判とも表裏一体のものであり、生活世界を植民地化するシステムに対抗する拠点として公共圏が新たに浮上したものとも考えられる。ただし社会現象を過程として捉えることを主眼とする初期シカゴ学派社会学やSIの立場は、社会システム論の考え方を採用してこなかったので、本論でもそうした議論には触れないことにする(Abbot 2009)。
- 14 訳書では再帰性と訳されている。ミード自身がロマン主義の哲学における「自らをふり返ること」の発祥を論じた知識社会学的考察として、Mead(1936=1994)を参照。
- 15 話想宇宙で普遍性に到達する際にはたらく態度・役割取得のメカニズム(「理想的な役割遂行」「他人の靴を履いてみる」こと)についての、ミード自身による説明の事例を念のため掲げておく。

自らを他人の位置におかせる能力が、特定の状況で何をなすべきかについてのきっかけを与える。わたしたちが所属している社会は、個人が含まれている一定の状況に対する反応の組織化された組合せをあらわしており、そして、個人が彼自身の性質のなかにこのような組織化された反

応を取りいれることができ、それらの反応をシンボルによって社会的反応のなかに呼びおこすことができる限り、彼は、心的過程が進行する精神を所有する。その精神の内的構造は、その個人が、彼の所属する社会から取りいれたものだ。(Mead 1934:270= 1973:282-83)

- 16 「共通の観念」とあるが、異なった成育史をもつふたりの人が同一の観念を持つとは考えられず、ミードがそうした機微を考慮していなかったとは思えない。それゆえここは、相互作用のなかで「共通の観念」として機能する程度の共通性のある観念を言いあらわす言葉の短縮形として、この表現が現れていると解すべきであろう。
- 17 この語は意味内容から「共有意味世界」と訳されることもある。Mead(1936=1994) 参照。ニュアンスの違いはあるものの、ミードのもちいる英語の discourse とハバーマスにおけるドイツ語の Diskurs(討議) の語源的な共通性も興味深い。
- 18 本引用文中の[]内は訳者(稲葉三千男・滝沢正樹・中野収)による補足。
- 19 政治的討議への市民の参加の度合い、合理的で批判的な討議の活用という二点に関し、ハバーマスの論じる公共圏に値するような状況は、アメリカの政治社会にかつて存在したことはないと述べる論者さえいる (Schudson 1992)。
- 20 この部分では、public という単語の使用を通じ、ハバーマスの公共圏が、ゴッフマンの『集まりの構造』(Goffman 1963=1980. *Behaviour in Public Places*) などで議論の内容とも、接合されるのかもしれない。
- 21 いうまでもないことだが、この表現はミルズの社会学的想像力の冒頭部分を意識したものであろう (Mills [1959] 2000=[1965] 1995)。
- 22 このように公共圏の存続やその成立をめぐり印刷メディアの果たした役割を重視する視点は、分量としては少ないながらも『公共性の構造転換』にも見ることができる (Habermas [1962] 1990:28-41=[1973] 1994: 26-38)。ただし著作としての本筋は、対面的な相互作用としての討議を重視する文芸的公共圏から政治的公共圏への、質的發展を論じる部分だったことも確かである。
- 23 社会的世界研究以外に、SI およびその隣接アプローチであるエスノメソドロジーに由来する構築主義の社会問題研究も、公共圏に関する研究として再編成できるだろう。構築主義では研究史の進展のなかで言説研究に偏る傾向が前面に出てしまったが、当然、構築主義の外部にいる研究者が、言説研究に集中するという縛りにとらわれずにその研究成果を利用することは可能だろう。

参考文献

- Abbott, Andrew, 2009, "Organizations and the Chicago School," Paul S. Adler, ed., *The Oxford Handbook of Sociology and Organization Studies: Classical Foundations*, Oxford, UK: Oxford University Press, 399–420.
- Arendt, Hannah, [1958] 1998, *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press. (=志水速雄訳, [1973] 1994, 『人間の条件』筑摩書房.)
- (intro., Amos Elon) [1963] 2006, *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, New York: Penguin Books. (= [1969] 1994, 大久保和郎訳, 『イェルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』みすず書房.)
- Becker, Howard S., [1982] 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary Ed., Berkeley, Los Angeles: California University Press.
- Burawoy, Michael, 2005, "For Public Sociology," *American Sociological Review*, 70: 4–28.
- Calhoun, Craig (ed.), 1992, *Habermas and the Public Sphere*, Cambridge, Mass.: MIT Press. (=1999, 山本啓・新田滋訳, 『ハバースと公共圏』未来社.)
- Clarke, Adele E., 1998, *Disciplining Reproduction: Modernity, American Life Sciences, and "the Problems of Sex"*, Berkeley, Los Angeles: University of California Press
- 2005, *Situational Analysis: Grounded Theory after Postmodern Turn*, Thousand Oaks: Sage.
- Clarke, Adele E., Janet K. Smith, Laura Mamo, Jennifer Ruth Fosket and Jennifer R. Fishman, 2003, "Biomedicalization: Technoscientific Transformations of Health, Illness, and U.S. Biomedicine," *American Sociological Review*, 68: 161–194.
- Ferguson, Adam (Ed., Louis Schneider), [1767] 1980, *An Essay on the History of Civil Society*, New Brunswick, New Jersey: Transaction. (=1956, 大道安次郎訳, 『市民社会史』上・下, 河出書房.)
- Foucault, Michel, 2004, *Naissance de la Biopolitique: Cour de Collège de France (1978–1979)*, Paris: Gallimard/Seuil. (=2008, 慎改康之訳, 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義 1978–1979 年度』筑摩書房.)
- Fujimura, Joan H., 1996, *Crafting Science: A Sociohistory of the Quest for the Genetics of Cancer*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Glazer, Barney G., and Anselm L. Strauss. 1967. *The Discovery of Grounded*

- Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine de Gruyter. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press of Glencoe. (=1980, 丸木恵祐・本名信行訳, 『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)
- Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt/Main: Suhrkamp. (=1985-1987, 河上倫逸・M. フーブリヒト・平井俊彦(上)・藤澤賢一郎・岩倉正博・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎(中)・丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場孚瑳江・脇圭平(下)訳, 『コミュニケーションの行為の理論』上, 中, 下, 未来社.)
- 1985, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1987, trans., Frederick Lawrence, *The Philosophical Discourse of Modernity: Twelve Lectures*, Cambridge, UK: Polity.) (=1990, 三島憲一・轡田収・木前利秋・大貫敦子訳, 『近代の哲学的ディスクリス』II, 岩波書店.)
- [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied(Luchterhand), Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1973] 1994, 細谷貞雄・山田正行訳, 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』第2版, 未来社.) (=1992, Trans., Thomas Burger, *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, Cambridge, UK: Polity.)
- [1990] 1992, "Further Reflections on the Public Sphere," *Calhoun* 1992:421-61. (=1994, 細谷貞雄・山田正行訳, 「一九九〇年新版への序言」 Habermas [1962] 1990=[1973] 1994:i-xlvi.)
- 1992a, *Faktizität und Geltung: Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1996, trans., William Rehg, *Between Facts and Norms: Contributions to a Discourse Theory of Law and Democracy*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.) (=2002-2003, 河上倫逸・耳野健二訳, 『事実性と妥当性——法と民主的法治国家の討議理論にかんする研究』上, 下, 未来社.)
- (三島憲一訳), 2000, 「序文」, 三島憲一編訳, 『近代——未刊のプロジェクト』岩波書店, iii-x.

- 花田達朗, 1996, 『公共圏という名の社会空間——公共圏、メディア、市民社会』木鐸社。
- 1999, 『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会。
- Horkheimer, Max and Theodor W. Adorno, [1947] 1981, *Dialektik der Aufklärung : philosophische Fragmente*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2007, 徳永恂訳, 『啓蒙の弁証法——哲学的断想』岩波書店。)
- 飯島祐介, 2012, 「世俗社会における宗教と公共性——ハーバーマスの宗教論をめぐって」盛山他編 2012:157-173.
- Joas, Hans (Trans., Raymond Meyer), [1980] 1985, *G. H. Mead : A Contemporary Re-examination of his Thought*, Cambridge, UK: Polity.
- 鎌田大資, 2008, 「アメリカ社会学史における量的調査と質的調査——初期シカゴ学派およびアーネスト・W・バージェスの軌跡が照射するもの」『フォーラム現代社会学』(関西社会学会) 7:113-124.
- 2010, 「分水嶺としてのバージェス——家族社会学とシンボリック・インターラクショニズムの交点」『人間関係学研究』(椋山女学園大学) 8:17-30.
- 2011, 「アーネスト・バージェスの社会調査におけるケース・スタディと統計の相克——時期区分の試み」『椋山女学園大学研究論集』42 (社会科学篇) :177-192
- 2011a 「第二次世界大戦後の文化史における二つの転機とライフストーリーの視点——マンガ表現史から心性史への架橋としての「一代記」もの」『人間関係学研究』(椋山女学園大学) 9:13-25.
- 鎌田大資・中野正大, 2003-05, 「初期シカゴ学派社会学の確立——E・W・バージェスの人と作品」『人文』(京都工芸繊維大学工学部) 51:23-75, 52:73-118, 53:93-133.
- 岸川富士夫, 2011, 「J.ハーバーマスの思想における社会国家」『愛知大学経済論集』186: 115-42.
- Mead, George Herbert (ed., intro., Charles W. Morris) 1934, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店, =1995, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社。)
- (ed., intro., Merritt H. Moore) 1936, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*. Chicago: University of Chicago Press. (=1994, 魚津郁夫・小柳正弘訳, 『西洋近代思想史——十九世紀の思想のうごき』上・下, 講談社。)
- Merton, Robert K., 1968, *Social Theory and Social Structure*, 3rd Ed., New

- York: Free Press. (=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 『社会理論と社会構造』みすず書房. ただし底本は1957, 2nd ed.)
- Mills, Charles Wright(afterword, Todd Gitlin), [1959] 2000, *The Sociological Imagination*, Oxford, UK: Oxford University Press. (= [1965] 1995, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店.)
- 宮本直美, 2012, 「市民的公共性と芸術——市民社会における再現的公共性」
盛山他編 2012: 123-138.
- 西村稔, 1998, 『文士と官僚——ドイツ教養官僚の淵源』木鐸社.
- 野田宣雄, 1997, 『ドイツ教養市民層の歴史』講談社.
- 隠岐さや香, 2011, 『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセのユートピアへ』名古屋大学出版会.
- Petty, William, [1690] 2011, *Political Arithmetick, Or, a Discourse Concerning the Extent and Value of Lands, People, Buildings, Husbandry, Manufacture, Commerce, Fishery, Artizans, Seamen, Soldiers, Publick Revenues, Interest, Taxes*, Proquest, Eebo Editions. (=1955, 大内兵衛・松川七郎訳, 『政治算術』岩波書店.)
- Popper, Karl R., 1959, *The Logic of Scientific Discovery*. London: Hutchinson. (=1971, 大内義一・森博訳, 『科学的発見の論理』恒星社厚生閣.)
- Schudson, Michael, 1992, "Was There Ever a Public Sphere?" Calhoun 1992: 143-163. (=1999, 山本・新田訳, 「かつて公共圏は存在したのか? 存在したとすればいつなのか? アメリカの事例からの考察」, 160-189.)
- 盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編, 2012, 『公共社会学1——リスク・市民社会・公共性』東京大学出版会.
- Shibutani, Tamotsu, 1955, "Reference Groups as Perspective." *American Journal of Sociology*, 60:562-569.
- 1962, "Reference Groups and Social Processes." Arnold Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin, 128-147.
- Strauss, Anselm, 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction* 1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119-128.
- 1978a. *Negotiations: Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 1982, "Social Worlds and Legitimation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction* 4, Greenwich, Connecticut:

JAI Press, 171-190.

——— 1984, "Social Worlds and Their Segmentation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction* 5, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 123-139.

Strauss, Anselm, Leonard Schatzman, Rue Bucher, Danuta Ehrlich and Melvin Sabshin, [1964] 1981, *Psychiatric Ideologies and Institutions*. New Brunswick, NJ: Transaction.

富永茂樹, 2005, 『理性の使用——ひとはいかにして市民となるのか』みず書房.

吉田純, 2000, 『インターネット空間の社会学——情報ネットワーク社会と公共圏』世界思想社.

